

竹内オサム著

## 私家版『マンガ研究ハンドブック』

(同志社大学社会学部メディア学科 竹内長武研究室 2008年)

畠山兆子 (梅花女子大学)

本書は、1997年1月に私家版で出版された『マンガの批評と研究+資料』を、2003年7月に改訂した後、さらに再構成し追加収録と削除をして出版されたものである。マンガ研究を志す人のためのガイドブックを目指したもので、依頼原稿と著者の個人誌「ピランジ」に発表した文章を、〈状況〉〈歴史〉〈議論〉〈資料〉の四つに分けて収録している。

〈状況〉には5編が収録されており、著者が子どもマンガの研究を志した1980年代から、今日に至るマンガ研究の状況を知ることができる。「マンガ研究の現在」(「水声通信」14号 2006.12)には、「マンガ研究の発展を考える場合、まずは文献目録の整備、肝心のマンガ作品そのものの複製、資料館の設立、年表の作成、マンガ事典や研究のガイドブックの刊行が急務だろう。」(34頁)とある。マンガ研究の深まりを求め、研究のための基礎作り而努力してきた著者ならではの言葉である。

子どもの文化や子どもの文化財の研究にかかわる者にとっては、程度の差こそあれ思いは同じである。「大阪国際児童文学館とマンガ資料」(「EYE MASK」24号 2002)で紹介されている大阪府立国際児童文学館の70万点に及ぶ資料は、児童文学関係が中心であるが、知る人ぞ知るマンガ資料の宝庫でもある。収集保存に目配りがなされており、公開方法においても利用しやすい配慮のある資料館であると著者は紹介している。そして「ぼくはここ数年、毎回のよう、朝日新聞社主催の手塚治虫文化賞の特別賞に館の名前をあげるのだが、どうもその存在価値がうまく伝わらないようだ。」(37頁)と嘆いていたが、2008年5月、第12回手塚治虫文化賞特別賞を受賞した。著者の尽力が実を結んだのである。その存在意義が認められ大きな評価を得たにもかかわらず、大阪府知事は大阪中央図書館への統合移転の方針を撤回することなく現在(2009年3月)に至っている。子どもにかかわる資料は、消耗が激しく、意識して保存しないと残らない。現地存続を求める請願を無視した行政によって、貴重な資料が有効に活用できなくなる事態が進行しているのである。研究者にとって、原資料を見るのは研究の入り口であり、改めて言うまでもなく先行文献に敬意を払うのは当然のことである。

〈歴史〉には4編収録されているが、「マンガをめぐる言葉(83~98)」(「COMIC BOX」84~99)は、依頼された年の「評論研究の動向」について執筆したものである。幅広い目配りがなされており、取り上げた文献の短評も興味深く、評論研究の大まかな流れを読み取ることができる。毎年ではなく間が空いているのと、1998年までなのが残念である。

著者は、修士論文「手塚治虫マンガにおける映画的手法の研究」によって、マンガ研究をスタートさせた。「マンガ表現論の系譜・付文献リスト」(ピランジ)21号 2008.3)は、そのような著者の研究の歩みを踏まえて、今日までのマンガ表現論の変遷と問題点を明らかにしたものである。問題点として、ここでは「表現の自立性」「研究方法」「研究の対象」「思考の

モデル」の4つの要素を取り上げて述べている。最後に付けられた「マンガ表現論の文献リスト」(97～101頁)とともに、マンガの表現論を志す者の必読の手引きになるだろう。ここでは4つの要素にしか言及していないが、『マンガ表現学入門』(筑摩書房 2005.6)では、「歴史」「連続性」に加え、「無意識」をキーワードに、マンガの隠された表現のヒダを顕在化できないかとのアプローチを試みた。(96頁)と述べ、研究深化の方向を示唆している。

〈議論〉には7編収録されているが、最初の「戦後マンガ史年表」の作成にあたって(「ポラーノ」6号 1995.3)は、『戦後マンガ50史年』(筑摩書房 1995.3)の巻末年表作成の裏話である。歴史研究には正確な年表が必要なことは言うまでもないが、それは多くの時間を必要とする地道な努力によってしか作成できないものである。しかし、その地道な作業によって、有効なテーマや資料を発見することになるのも事実である。「急がば回れ」とはこのことで、研究者たるもの肝に銘じたい。正確な年表作りは、マンガ研究者としての揺るぎない自信と仕事を支える要因なのである。なお、著者制作のより正確な「現代漫画史年表」が、『現代漫画博物館』(小学館 2006.11)の「別冊・資料編」に収録されている。

「マンガ研究のモラルについて—引用と参照の問題—」(「ピランジ」9号 2002.4)は、研究の初歩的マナーについて述べたものである。マンガ研究の後発性を示すものではあるが、ここにも研究を先導する者の熱い思いを見ることができる。

以上2編以外の4編は、夏目房之介著『マンガ学への挑戦』と伊藤剛著『テヅカ・イズ・デッド』への反論である。とくに後者『テヅカ・イズ・デッド』は、竹内オサム著『マンガ表現学入門』(筑摩書房 2005.6)を批判している。それへの反論2編をまとめた「伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド』への反論」(127～152頁)は、永年の研究を基盤に、説得力ある批判を展開している。

最後の「〈同一化技法〉についての議論」(「EYE MASK」33号 2006.12)で著者は、「竹内の言う「同一化技法」が、これまで評論や研究の世界で無視されてきたにもかかわらず、急にここ数年議論の対象とされている点に、何かうなずけない思いを抱いてしまう。この「同一化技法」の指摘など、実は三十年前の論文にすぎないのに。」(156頁)と述べているが、研究のレベルがようやく著者の研究に追いついたと考えることもできる。著者もそのように考えたのであろう。前書きに「恥をしのんで」とはあるが、「ピランジ」22号(2008.9)から「修士論文＝手塚マンガの映画的手法——その1」(135～)の連載が始められている。関心のある方は、ぜひお読みいただきたい。

〈資料〉編は、マンガ研究を志す者にとって、必読のものである。書評執筆者は、著者と同一時期に同じ教授の指導の下で、児童文学の研究を志した。マンガ研究ほどではないが、児童文学研究もまた認知度が低かった。それゆえ、著者の研究者としての姿勢や思いは身近なものである。身内鼯鼠があるかもしれない。しかし、個人誌を発行し、マンガ研究を盛りたて、後進を育てようとする著者の努力と情熱は本物である。

最新刊「ピランジ」23号(2008年3月)に、本書が『本流!マンガ学—マンガ研究ガイドブック』と改題、再編集して晃洋書房から出版されることが報告されている。書店で購入することができるようになったわけである。マンガ研究のレベルアップのために喜びたい。